

在韓日本人女性の位置どりとアイデンティティ構築に

日韓関係の悪化が及ぼす影響について

—2019年夏に韓国で起こった日本製品不買運動に関する語りの分析を中心に—

竹村博恵(大阪大学大学院生)

1. 研究の背景と目的

本研究では、韓国人男性と国際結婚をして韓国に移住し暮らしている日本人女性を「在韓日本人女性」として位置付け、彼女たちのアイデンティティを「前提にされるべきカテゴリーではなく、『様々な意味が競合する』場」(藤高, 2018:149)として捉える。在韓日本人女性の文化的アイデンティティや母親アイデンティティに関する先行研究では、韓国で繰り返される母国への批判が彼女たちのアイデンティティの構築に影響を及ぼすという指摘がなされている(Ishii ほか, 2015; Park, 2017)。バトラーは『戦争の枠組み』の中で、自分ではコントロールできない状況に直面すると身体の応答性が活性化され、そこではある特定の解釈行為が暗黙のうちに確立されると述べており、その解釈の中には自身を侵害し影響を与える社会的世界を身体がどのように認識し、それらに対しどのようにネゴシエイトしていくかを決定する枠組みが現れると指摘する(バトラー, 2012:48-49)。2019年夏に韓国で起こった日本製品不買運動は、政治的領域における日韓関係の悪化が韓国社会全体に普及し、彼女たちの生活領域にまでその影響が及んだ出来事であり、彼女たちにとってまさに自分の力ではどうしようもない出来事との遭遇であったと言える。本研究では、不買運動に関する彼女たちの「語り」とそれを取り巻く相互行為に焦点を当て、その両方における彼女たちの位置取りと、それに伴って構築されるアイデンティティについてポジショニング理論を採用し分析・考察する。そして、それらの分析を通して、彼女たちがその当時自分を取りまく社会的世界をどのように認識していたのか、その中でどのように自らを位置付けネゴシエイトしていたのかについて検討し、日韓関係の悪化が彼女たちの位置取りやアイデンティティ構築に及ぼす影響を明らかにすることを目的とする。

2. 研究方法

2.1 調査方法

本研究で使用するデータは、2019年8月9日に韓国で実施したインタビュー調査の一部である。インタビュー参加者3名はインタビュアーである調査者も含め全員が在韓日本人女性であり、日韓にルーツを持つ子供を韓国で育てる母親でもある。インタビュイーであるエリ(仮名)とチヒロ(仮名)は友人同士であり、年齢はともに30代前半、在韓歴はエリが7年、チヒロが9年である。インタビュアーである調査者は30代後半であり、在韓歴は7年になる。3人はインタビュアーの友人を紹介して出会い、インタビュー実施時が初対面であった。インタビューはインタビュアーの自宅で、エリの生後17ヶ月になる子供も同席のもと実施された。その際には、ビデオカメラ2台による録画とボイスレコーダーによる録音を行った。

2.2 分析の枠組みと方法

本研究ではインタビューの中に現れるスモール・ストーリー²(Bamberg & Georgakopoulou 2008, 秦 2013)に着目し、ポジショニング分析(Bamberg, 2004)を通して、語りの世界における自己(レベル1)、語られる世界における自己(レベル2)、その両方の分析を通して現れる包括的な自己(レベル3)の3つのレベルから分析を行う。

¹ バトラーは身体について「身体とは、わたしたちが、自分のものであるかもしれないしそうでないかもしれないさまざまな観点に出会う場である。わたしたちがどのように出会われ、どのように維持されるかは、根本的に、この身体が生きている社会的、政治的ネットワークによっている。」と説明している。(バトラー, 2012:72)

² スモール・ストーリーとは短い内容のものであり、具体的な例としてはインタビューの中に現れる現在進行中の出来事や、未来や仮定の出来事に関する語り、ほのめかし、語りを据え置くこと、語ることを拒否することなどが挙げられる(秦 2013:250)。

3. データと分析

データ1の開始前、不買運動に対しインタビュー2人の方に共通して「悲しみ」が存在していること、特にエリは「怒り」も感じていることが話された。また、2人は日本の韓国に対するバッシングに対しても「悲しみ」を感じると述べ、エリは「自分の生まれ育った国をバッシングされるのは寂しく、こんなに近い国なのと思う」と話した。以下、データ1とデータ2では、エリの語るスモール・ストーリーを中心に、それを取り巻く相互行為の場における参加者3人のやりとりも含め分析を行う。

3.1 データ1「生まれてくる悲しみ」

- | | |
|------------------------------------|-----------------------------|
| 1. エリ : (4) ああっ(.) わかった(右手で机の上を指す) | 19. エリ : 自分の家族をなんかこう |
| 2. : なんやろう(.) 例え↑ば: | 20. チヒロ : (微妙に笑い) そうかも |
| 3. : (.) にほ↑ん: No Japan を見て生まれるの↑は | 21. エリ : ちょっと¥虐められてるっていうか¥ |
| 4. : 自分::: (.) ↑が (右肩を叩く) | 22. チヒロ : [@@@@@ |
| 5. チヒロ : う:::ん (何度もうなずく) | 23. エリ : [そういう感じの[悲しみかな? って |
| 6. エリ : 傷つく感じ↑で: | 24. チヒロ : [そうかも |
| 7. 調査者 : う::: [↑ん | 25. エリ : [今考えてみたら |
| 8. エリ : [にほ↑ん::: で:: | 26. 調査者 : [ん↑::: |
| 9. : (.) あの韓国の過激なやつ | 27. エリ : (何度もうなずく) |
| 10. : (.) を見るとなんかかぞっ↑く:: | 28. エリ : 思いました |
| 11. 調査者 : あ↑あなる[ほ↑ど | 29. : ¥だから多分自分の方が¥ (チヒロを見て) |
| 12. エリ : [に対する悲しみみたいな感じ | 30. : (胸のあたりに手を置く仕草) |
| 13. チヒロ : (ずっとうなずく) | 31. : もっとむかつくし |
| 14. チヒロ : [う:::ん そうかも そうかも | 32. : [もっと悲しいしっていうのが |
| 15. チヒロ : (うなずきながら) | 33. チヒロ : (何度もうなずく) |
| 16. 調査者 : ん::: : | 34. 調査者 : [ん↑::: |
| 17. エリ : 自分というよりか¥は | 35. エリ : あるのかも (2) うん |
| 18. チヒロ : う:::ん | |

データ1の開始前にエリが自分の母国をバッシングされることと「悲しみ」を関連づける発言をしていたため、インタビューは日本が韓国に対しバッシングを行う際に生じる「悲しみ」は何かという質問を行う。それを聞いたエリは考える様子を見せた後、韓国でNo Japanを目にする状況(3, 4, 6)と、日本で韓国に関するネガティブな情報を見る状況(8-10, 12)の両方をスモール・ストーリーとして提示する。エリはその際に生じた感情について、前者では「自分が傷つく感じ(4, 6)」、後者では「(自分の)家族に対する悲しみ(10, 12)」、「家族をちょっと虐められているという感じの悲しみ(17, 19, 21, 23)」と説明する。エリの物語世界に関する説明は、現状においてエリの中に、日本人であるが故に被害感情を持つ自己と、韓国人の家族を持つ者として家族を思いやる自己という二つの立ち位置が併存していることを示している(レベル1)。さらに、相互行為の場において物語世界の中で生じた2種類の「悲しみ」について言及することを通して、エリ自身が「今考えてみたら(25)」「思いました(28)」と自己の位置付けについて再認識している様子も見受けられた。また、エリのスモール・ストーリーを聞きながら、同じ在韓日本人女性として5行目ではチヒロが、11行目ではインタビューアが、エリが自身の感情について明確に言及する前にそれを先取りして理解したようなリアクションを見せていた。特にエリが自身の家族に言及する件では、チヒロが何度もうなずいたり「そうかも(14, 20, 24)」という発言をしたりすることでエリの意見に同意を示す様子が見られた。エリ自身も、発言した後にチヒロの方を瞬見して彼女の表情を気にする様子を見せる(29)など、在韓日本人女性3人が相手の反応を気にしつつ互いに賛同を示しあいながら現状認識(不買運動は自身が傷つくゆえにより腹立たしく悲しい)と今回の騒動における自分たちの位置づけ(身の置き所のなさ)を協働構築していく様子も観察された(レベル2)。このようにデータ1の中では、エリによる2つのスモール・ストーリーの提示と、それを取り巻く参加者の相互行為でのやり取りを通して、「日本と韓国のどちらの国でもネガティブに捉えられるマイノリティとしての私(たち)」(レベル3)という包括的なアイデンティティが表出・構築されていったと考えられる。

3.2 データ2「日本も悪いのには絶対ゆってる」

- | | |
|------------------------------|-----------------------|
| 40. 調査者 : [でっ(.) それ(.) を聞いてっ | 41. : (.) どうっ(.) いう風っ |
|------------------------------|-----------------------|

42. エリ : あっ(.)やっぱ安倍さんのことも
 43. : ¥悪く言うんやなって¥
 44. : (..)思っ(チラッとチヒロを見る)
 45. : まあ安倍さん私もそんなに好きじゃない
 46. : [ですけど
 47. チヒロ : [う:::ん
 48. 調査者 : う:::ん
 49. : (エリの子供がパンを落とす・チヒロが拾う)
 50. エリ : (3)う:::ん
 51. : (2)で↑う:::んやっぱにほ↑ん
 52. : (.)なんていうかその小さい時からの教育も
 53. : やっぱ若干
 54. : (右手を体の右側で左右に振る)
 55. 調査者 : ふ:::ん
 56. エリ : 心の中にあんの↑か::
 57. : (再度右手を右側で左右に振る)
 58. : (チヒロを見る, チヒロうなづく)
 59. エリ : 日本も悪いのにつて
 60. エリ : [は(.)絶対ゆってる気がします
 61. チヒロ : [うんうん
 62. 調査者 : う:::ん↑ん
 63. チヒロ : (61行目以降ずっとうなづく)
 64. エリ : (1)でも日本だけが悪い
 65. : (.)とは(.)言わないですけどいつも
 66. 調査者 : ふ:::ん↑ん
 67. エリ : °それは絶対ゆわらないですけど°
 68. チヒロ : (大きくうなづく)
 69. 調査者 : (1)そうですね
 70. : それが日本も悪いと
 71. : 日本[だけが悪いってだいぶ違いますよね
 72. エリ : [うん(少し微笑む)
 73. 調査者 : ニュアンスがね(チヒロうなづく)
 74. エリ : であ↑のそういう No Japan とかするの↑も:
 75. : (.)間違ってるっていう↑か
 76. : そんなんしても意味ない
 77. : (..)とはゆってくれてますけど
 78. 調査者 : う:::ん↑ん
 79. エリ : うん

データ1から2の間では、エリが、文大統領と安倍前首相の2人が過激だから不買運動が起こったと夫が言ったという語りを行い、データ2の開始部分(40, 41)ではインタビュアーがその発言をどう思ったのかエリに尋ねる。それを受けエリは、「あっやっぱ安倍さんのことも悪く言うんやなって思っ(42-44)」と自身の心の声を直接引用で再現し、「夫との立ち位置の違いを認識する私」(レベル1)の姿を提示することで返答する。ここでエリが感じた立ち位置の違いは、その直後(45, 46)にエリ自身が安倍前首相を好きではないと発言していることから、政治家に対する個人的見解の相違ではなく、夫が韓国だけでなく日本も悪いと言ったという点に対するものであることがわかる。また、発言の中で使用される「やっぱ(やはり)³」からは、不買運動に対し否定的な姿勢を見せていてもやはり夫は日本のことも悪く言うのだ⁴というエリの認識が窺える。その後、エリは夫の発言について、韓国における「小さい時からの教育(52)」が「若干心の中にある(52-54, 56)」からではないかという自身の分析を述べた上で、59-60行目では「日本も悪いのにつては絶対ゆってる気がします」と、夫が日本も悪いと言うということを明示する。エリが言う「小さい時からの教育(52)」とは韓国で行われる反日教育のことを指していると推測され、エリは分析の際に「韓国人は反日教育を受け反日感情を持っている」という日本社会に存在する韓国人に対する認識の枠組み(言論NPO, 2020; 呉, 2013)を使用することで、夫の発言は韓国の国家的教育方針に起因するものであり、それゆえに自身との意見の相違が生まれるのは仕方のないことであるという認識を他の参加者に対し示している。しかしながら、続く64-65行目では「でも日本だけが悪いとは言わないですけどいつも」、「それは絶対言わないですけど(67)」と発言し、「No Japan とかするの間違い(74, 75)」「そんなんしても意味ないとはゆってくれる(76, 77)」と夫が不買運動に否定的であることに言及し、同時に「くれてます(77)」という恩恵授受表現を使用することで「不買運動に対し否定的であり自身のことを気遣ってくれる夫とそれに感謝している私」(レベル1)という位置取りも参加者に対し示していた。2つのスモール・ストーリーを語る中で、エリは、日本も否定する夫の姿を認識しつつも韓国生活の支えでもある夫がそのような発言をするのは反日教育の影響だと分析する姿勢と、「反日教育を受けていたとしても100%韓国を支持する発言は「絶対ゆわらない(67)」夫をもつ私」(レベル1)という自身の立ち位置を他の参加者に対し提示している。また、そのようなエリの発言に対し、チヒロは「うんうん(61, 63, 68, 73)」と相槌を繰り返す、調査者も受け入れる様子を見せており(62, 66, 69-71, 73)、「韓国人の夫が日本のことも悪いと言うのは反日教育の影響のせいであり、意見の相違はあるが日本人として尊重してもらっている私」という立ち位置が3人の間で受け入れられ共有されている様子も観察された(レベル2)。このようにデータ2においては、夫との意見の相違の認識、相違が起こる原因の分析、それでも夫は自分の味方であることの再確認といった行

³ 曹(2001)は「やっぱり」には基本的に話し手の主観的な判断を表す機能が存在し、順接の論理上では「妥当な推論の結果としての話し手の判断(XだからやっぱりY)」を表し、逆接の論理上では「話し手の認識の確認や再確認(Xが、けれども、の(に)やっぱりY)」を表す機能が存在すると説明している。

⁴ エリの夫は、他の不買運動に関する語りの中で、不買運動を行う人々を馬鹿な人と表現し、エリに対し気にしないようにと伝えるなど、不買運動に対し否定的な姿勢を見せる存在として位置付けられていた。

為が参与者 3 人の中で共有される中で、「韓国社会の中に身の置き所のなさを感じながらも自分の居場所をなんとか見つけ出そうと試みる私 (たち)」(レベル3) という包括的なアイデンティティが協働構築され表出されたと考えられる。

4. まとめ

本研究では、インタビューの中に現れた在韓日本人女性の不買運動に関する語りとそれを取り巻く相互行為の中で彼女たちが自分たちをどのように位置付け、アイデンティティを構築しているのかを分析した。その結果、日韓関係悪化の影響が彼女たちの生活領域にまで及んだために、そのような状況下で暮らす事を強いられた彼女たちがどちらの国にも身の置き所のなさを感じるようになり、そのような彼女たちの日常的立ち位置がアイデンティティ構築にも影を落としていることが明らかになった。特に、韓国生活の支えである夫との関係性においては、自身との意見の相違を認識しつつも、それでも韓国社会にあっては自分の味方であるということを再確認しようとする姿も見受けられた。相互行為の場では、日韓関係の悪化によって不安定な社会的条件の中に曝された彼女たちが、在韓日本人女性3人で構成されるミクロな社会において、自身を被害者として位置付けたり(韓国の不買運動は私自身を傷つける)、日本社会に存在する韓国人に対する認識枠組み(韓国人は反日教育を受けているので反日感情がある)を使用したりしながら、なんとか置かれた状況の中に自身の位置取りを見つつけようとネゴシエイトする過程も見受けられた。しかしながら、その作業は同時に、身の置き所のない生活状況の中で自身の立ち位置を正当化するために、彼女たちが協働で自分達独自の韓国社会や韓国人を理解するための共通認識の枠組みを構築する過程でもあった。ひとは自らの主体性を維持するために、自らが強制的に服従させられている規範を反復し、その暴力を他者へと振り向ける(藤高, 2018:267)。今後は、暴力に曝されている彼女たちもまた「暴力を他者へと振り向ける」存在でもあるという本研究で得られた視座を念頭に置きつつ、彼女たちがどのような社会的条件の中でどのようにネゴシエイトしながら生きているのかだけでなく、在韓日本人女性たち自身も含め、彼女たちを取り巻く社会的世界の中で生じる暴力の連鎖をどうすれば断ち切ることができるのかについても検討していきたい。

トランスクリプト記号

(./(..) 0.2/0.5 秒以下の短いポーズ	ああ	声が前後に比べて大きい箇所	:	音の引き伸ばし
↑↓ イントネーションの上昇と下降	[発話の重複の開始箇所	(:	(:の数が長さを表す)
(数字) (数字)秒の短いポーズ	°ああ°	声が前後に比べて小さい箇所	><	前後に比べ発話速度が
_____ 強制的に発音される箇所	¥-¥	笑いながらの発話 (¥¥の間)		早い箇所
? 疑問形の上昇イントネーション	()	状況説明	@	笑い (個数は長さ)

参考文献

- Bamberg, Michael (2004). Form and Functions of ‘Slut Bashing’ in Male Identity Constructions in 15-Year-Olds, *Human Development*, 47 (6), 331-353.
- Bamberg, Michael., & Georgakopoulou, Alexandra (2008). Small Stories as a New Perspective in Narrative and Identity Analysis, *Text & Talk*, 28 (3), 377-396.
- Butler, Judith (2009). *Frames of War: When Is Life Grievable?*, London and New York: Verso. (=2012, 清水晶子訳, 戦争の枠組み-生はいつ嘆きうる者であるのか 筑摩書房.)
- 言論 N P O (2020). 第 8 回日韓共同世論調査結果 特定非営利活動法人言論 N P O(online), <https://www.genron-ngo.net/world/archives/9083.html>, 2020/10/15 アクセス.
- 秦かおり (2013). 「なんとなく合意」の舞台裏 在英日本人女性のインタビュー・ナラティブに見る規範意識の表出と交渉のストラテジー 佐藤彰・秦かおり(編) ナラティブ研究の最前線 人は語ることで何をなすのか ひつじ書房 pp. 247-271.
- 藤高和輝 (2018). ジュディス・バトラー 生と哲学を賭けた闘い 以文社.
- Ishii, Hiroko・Min, Kiyeon・Seongok, Yuhoa・Lee, Yongsun (2015). Investigating the Cultural Identity of the Japanese Marriage Immigrant Women in Korea, *The Journal of Multicultural Society*, 8(2), 107-144.
- 曹再京 (2001). 順接と逆説の論理からみた「やっぱり」の機能について 言語科学論集, 5, 37-48.
- 呉正培 (2013). 日本人大学生の韓国人に対するイメージの内容分析 - 韓国人大学生の日本人イメージとの比較 - *Journal of North-east Asian Cultures*, 35, 303-317.
- Park, Esther (2017). Qualitative Research on Conflicts in Child-Rearing and Coping Strategy among Japanese Wives in Marriage Based on Love, *Journal of Japanese Language and Culture*, 38, 281-302.